

仲間や地域に支えられて

4月の赴任から3ヶ月を過ぎようとしていますが、春先に吹く強い風を目の当たりにし、宗谷に戻ってきたことを改めて実感しています。

私は浜頓別町の隣町、枝幸町で生まれ高校まで18年間を過ごしました。大学を卒業後、北見柏陽を振り出しに、様似、小樽潮陵、枝幸、室蘭清水丘、札幌北と異動し、本校は7校目の勤務となります。

今回の原稿作成に当たり、改めてこれまでの浜高だよりに目を通してみました。入学式や学校祭、修学旅行などの行事、部活動の大会結果や進路の決定状況など、学校の様子が写真とともに紹介されているのは、他校と大きく変わりません。その中で私が注目したのは、卒業に当たり生徒が残している言葉です。「困難と一緒に乗り越えた」、「周囲の人の大切さと有り難さを感じた」、「目標や目的がなく生きていくことはとにかく虚しい」といった、経験した者にしか語れない表現で、入学からそれまでの学校生活を振り返り、クラスメイトや部活動の仲間との思い出や教員からの指導・助言で力を得た経験、さらには後輩へのアドバイスなど、溢れんばかりの思いが綴られています。自分が高校生だったこんな熱い思いを語ることができたかと、自分の未熟さにちょっと恥ずかしくなりましたが、それほどまでに充実した高校生活を送ることができた証なのだと思います。

本校のように1学年が1学級の高校は全道に60校、224校ある公立校の4分の1を超えています。そこには、生徒数が少ないことで団体競技の部活動が成立しなかったり、大学進学等の進路実績を十分に出せなかったりして、都市部の高校への生徒の流出が起きている現実があります。しかしながら、本校を卒業し、更には本校での経験を糧に、生まれ育った町で仕事をできることを誇りに感じる生徒たちの声を聞くと、改めて小規模校だからできる丁寧な教育の重要性を感じます。都市部の高校に進学した生徒たちが、必ずしも当初の目的を達成しているわけではないのです。

図らずもコロナ禍への対応を進める中で、大規模や対面でなくともできることが明らかになり、社会全体でもものの見方や考え方が変わりつつあります。本校には物心両面にわたって支えてくれる地域の方々のお力添えもあります。時代の新たな価値観に合った浜頓別高校ならではの教育を推進するために全力で取り組みますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。

令和4年（2022年）6月 浜高だより第157号 校長 三井 智和